

精神分裂病初発症状及び類型の時代的変遷

森下 茂, 児玉 洋幸, 新門 弘人, 渡辺 昌祐

昭和48年から昭和50年と、昭和63年のそれぞれに川崎医科大学精神科外来を受診した初発の精神分裂病患者各50例について、初期病像及び類型を調査した。両群に差はなかったが、精神分裂病が規定された20世紀初めと比較すると、緊張病型の減少、妄想型の増加が認められた。初期病像はその内容や主題に変化はあるが、精神分裂病そのものの本質に変化はないものと考えられた。

(平成6年2月28日採用)

Changes in Symptoms and Subtype Diagnosis of the First Stage of Schizophrenia

Shigeru Morishita, Hiroyuki Kodama, Hiroto Shinkado and Syosuke Watanabe

We studied the symptoms and subtype diagnosis of the first stage of schizophrenia in the Department of Psychiatry in Kawasaki Medical School Hospital over a ten year period and compared these results with studies of one hundred years ago. The diagnosis of catatonic schizophrenia was found to heredecreased markedly, whereas the diagnosis of paranoid schizophrenia increased markedly. Hebephrenic schizophrenia remained approximately the same. However the symptoms of the first stage of schizophrenia, which are auditory hallucination, delusion of persecution, autism and loosening of association, did not change. Possible causes for these findings include changes in the diagnostic criterion for schizophrenia. (Accepted on February 28, 1994) *Kawasaki Igakkaishi* 20(2): 109-113, 1994

Key Words ① Schizophrenia ② Symptoms ③ Diagnosis

はじめに

Kraepelin は1893年、彼の著書 *Psychiatrie* の第4版の中で、青年期に始まって最後には人格荒廃に陥る病態に対して、早発性痴呆 (*Dementia praecox*) という名称を登場させた。その後、Bleuler (1911年) が、Kraepelin の全経過を重要視する見方から横断的に臨床症状で診断する概念を導入して精神分裂病という名称を提唱し、さらに Schneider が症状論から、1

級症状、2級症状などの臨床症状を規定していることは良く知られている。今日においても精神分裂病の診断は、Kraepelin, Bleuler, Schneider らの規定した概念に負うところが多い。

約100年前に規定された精神分裂病であるが、時代の推移と共に病像が変化するということがしばしば問題にされ論議されている。そこで今回我々は、精神分裂病の初発の患者で、Kraepelin, Bleuler, Schneider らの唱えた症状が、

時代によって何らかの変化を持つかどうかを調査した。

方 法

川崎医科大学精神科外来を初診した患者のうち、昭和48年から昭和50年と、昭和63年の約10年を経過した2群間よりそれぞれ初発の精神分裂病と考えられている症例を50例づつ抽出し、以下のことについてカルテをレトロスペクティブに調査した。①初発年齢、②初診時診断、③Table 1に示すように精神分裂病の症状を、Kraepelin が初期分裂病として強調した緊張病症状、Bleuler の基本症状、Schneider の1級症状に分けて各症例が呈した主症状を複数解答でチェックした。

Table 1. The symptoms of schizophrenia

Bleuler の基本症状

- B1: 連合弛緩 B2: 感情障害 B3: 自閉
- B4: 両価性

Schneider の第1級症状

- S1: 思考化声 S2: 対話性幻聴
- S3: 批判性幻聴 S4: 身体被影響体験
- S5: 思考奪取, 思考干渉 S6: 思考伝ばん
- S7: 感情や欲動や意志の領域での他者からの作為や被影響体験の全て S8: 妄想知覚

Kraepelin の早初性痴呆の初期病像, 特に緊張病症状

- K1: 命令自動症 K2: 拒絶症 K3: げん奇症
- K4: 常動症 K5: 動行為

結 果

(1) 精神分裂病の初発年齢 (Fig. 1)

従来より知られているように、15歳から25歳までに多くが発症しており、時代別において差はなかった。

(2) 初診時診断 (Table 2)

破瓜型と妄想型はほぼ同数で、緊張型が少数であり、時代別において差はなかった。

(3) 精神分裂病の初発主症状 (Fig. 2)

a) Bleuler の基本症状では、連合弛緩 (B1)、感情障害 (B2)、自閉 (B3) が初発症状として

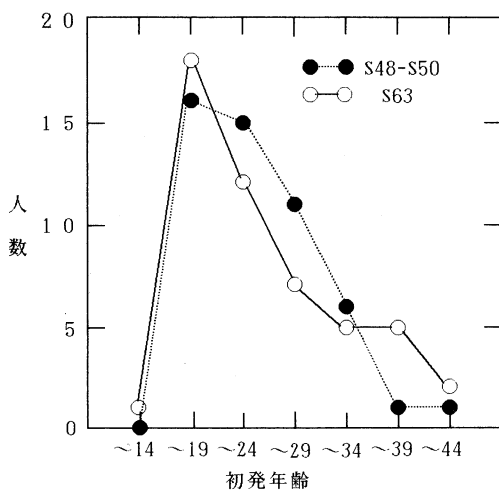


Fig. 1. The age of onset of schizophrenia

Table 2. Incidence of schizophrenia

	昭和48年~50年	昭和63年
破瓜型	例数 (46.0%)	例数 (48.0%)
妄想型	26 (52.0)	24 (48.0)
緊張型	1 (2.0)	2 (4.0)
計	50	50

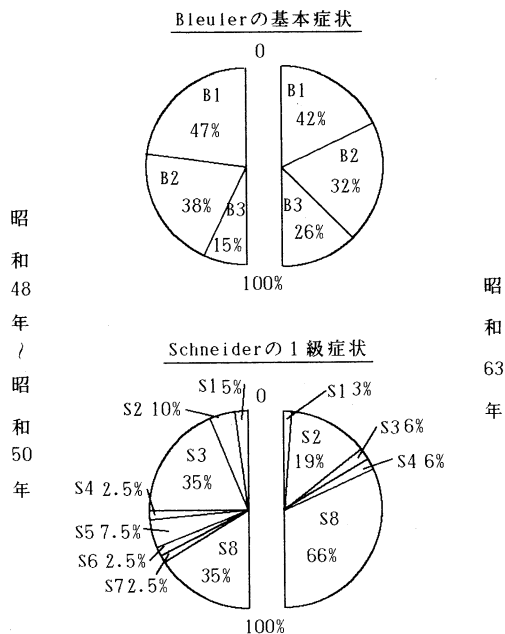


Fig. 2. The chief symptoms of the first stage of schizophrenia

みられ、その出現率は、時代別において差はなかった。

b) Schneider の1級症状では、幻聴を主体(S1, S2, S3)とする幻覚の症状と、妄想を主体(S8)とする思考障害が多く、自我漏洩体験(S5, S6)や作為体験(S4, S7)などの自我障害は少なく、時代別においてもその傾向は同じであった。

c) Kraepelin の強調した緊張病症状は、ほとんど見られなくなっていた。

考 察

時代の推移と共に精神分裂病の病像が変わるということは、しばしば取り上げられてきた問題であるが、我々の結果においては、川崎医科大学附属病院精神科が開院された昭和48年あたりと、約10年以上を経過した昭和63年では、精神分裂病の初発患者の初発主症状に変化はみられなかった。このことは、10年程度の時間的経過では変化はなく、もっと長い時間経過を比較してみなければならないということになる。そこで過去の文献を基に、症状と類型の変化を特に日本における変化を、アメリカ精神医学が入ってきた第2次世界大戦前と後に大きく分け、また外国におけるものと比較した。

(1) 第2次世界大戦前

Bleuler (1911)¹⁾は、入院中の精神分裂病者の半数以上が常同症を呈する緊張型であり、次に破瓜型が多く、妄想型はやや希であると記述し、Kraepelin も妄想型は比較的希な病型であると記述しているとしている。ところでわが国における戦前の症状、類型に関する研究は多く見あたらない。そこで代表的な医学書における記載を拾ってみた。杉田直樹は、最新精神病学第5版(昭和9年)²⁾の中で、幻聴が初期より存在すること、幻視・幻触も少なくないこと、幻味・幻臭は希であることを述べ、妄想内容については初期は、注察、被害、追跡、被毒、貧困、心気、化身といった消極的内容のものが多いと述べている³⁾。三宅鑛一は、精神病学提要第5版(昭

和19年)⁴⁾の中で、幻視も多くみられるとしている。しかし、植松七九朗は、精神医学第4版(昭和22年)⁵⁾の中で、幻聴は圧倒的に多いが、幻視は遥かに少ないと記述している。共通することは、幻聴は初期の症状として古くから優勢であったということであり、今日でも幻聴の占める割合は多く、この点に関しては変化していないということになる。これとは別に注目すべきことは、三宅鑛一は⁴⁾、松澤病院における奥田三郎氏の精神分裂病統計の破瓜型26.3%、緊張型34.5%、妄想型25.5%を紹介している。これはKraepelin や Bleuler とは違い、妄想型の占める割合がかなり増加している。類型の割合に変化がみられているとも考えられる。

(2) 第2次世界大戦後

西園ら^{6),7)}は、九州大学神経精神科に入院した精神分裂病者を調査し、緊張型の割合が減少し、妄想型の割合が増加していると報告し、それに伴って症状面でも暴行、興奮などが減少し、自閉、無意などが増加しているとしている。彼らの統計では、妄想型が増加し、緊張型が明らかに減少しているのは昭和30年代以後でありそれまでは、Bleuler や Kraepelin が言うのと同じく妄想型はかなり希なものであり、緊張型が優勢である。しかしながら先にも述べたように、松澤病院の統計では少なくとも昭和10年代にすでに妄想型が増加しており、類型の割合の変化はかなり早い時期からであったのかもしれない。そのほかに石井ら⁸⁾は、東北大学に入院した初発精神分裂病患者を調査し、大正末期より徐々にカタレプシーなどの緊張病症状が減少していることを報告している。小田⁹⁾は、倉持らの調査を紹介し、精神構造の面から農村居住者を多く含む「伝統関心型」と破瓜型・緊張型、地方中小都市居住者を多く含む「選択関心型」と妄想型、大都市居住者を多く含む「外周関心型」と神経症型分裂病・境界例の間に高度の相関が見いだされることを述べ、これら類型は時代の推移により影響を受けている考えがあることを述べている。これらの類型を考える上で問題になることは、各時代、施設、学派によって診断基準に差がある

と思われることである¹⁰⁾。このことが一般に比較を難しくしているのは事実である。いずれにせよ Bleuler が精神分裂病を考えた時代と現在とでは、我々の結果も含めて類型の割合に変化があることは事実であろう。

小山内¹¹⁾らと藤森^{10),12)~14)}は、妄想の主題内容の変化が時代の推移によってあり、誇大妄想、つきものの妄想などが減少し、被害、関係、注察妄想などが増えていることを述べている。しかしながら我々が今回調査したと同じ初発症状の推移を細かくこれらの論文から読み取ることはできなかった。個々の症状の主題、内容と類型の割合に時代的変遷はあるものの、精神分裂病の各類型は Bleuler が考えたものと大きく様変わりはしていないように思われる。

(3) 外国における研究

精神分裂病像の変遷に関する研究は、ドイツ語圏で多くみられるという⁸⁾。それらによるとやはり緊張病型の減少と日本同様、妄想内容の

変化はみられている。英国の Klaf¹⁵⁾は、精神分裂病の100年間の比較を試み、精神運動興奮は減少しているが、その他多くの臨床像は差がなかったと報告している。米国の Brill¹⁶⁾や Morrison¹⁷⁾は、緊張型ばかりか破瓜型まで極端に低下していたと報告したが、その原因は診断基準の変化にあるだろうと語っており、日本同様比較研究の難しさを感じる。

日本及び諸外国の研究の多くは、妄想内容や主題、類型の割合に時代的変遷は認めているものの、精神分裂病そのものに変化があることは明らかにされていない。このことは精神分裂病の基本は変化しないということなのかもしれない。精神分裂病の時代的変遷を研究して行くことは、精神分裂病が単一の疾患なのか、いくつかの疾患が重なりあった症候群的なもの、つまり精神分裂症なのかの区別を可能にしてくれると考えられ今後も重要であると感ずる。

文 献

- 1) Bleuler E: 早発性痴呆または精神分裂病群 (Dementia Praecox oder Gruppe der Schizophrenien. Leipzig und Wien, Franz Deuticke. 1911). 飯田 真, 下坂幸三, 保崎秀夫, 安永浩記. 東京, 医学書院. 1974, pp 269—287
- 2) 杉田直樹: 最新精神医学. 「内因性痴呆」(下田光造, 杉田直樹編), 第5版. 東京, 克誠堂書店. 1934, pp 154—184
- 3) 杉田直樹: 臨床医学講座109号. 「精神乖離症の診断及び治療」. 東京, 金原書店. 1938, pp 1—48
- 4) 三宅鑛一: 精神病学提要. 「精神分裂病」, 第5版. 東京, 南江堂. 1944, pp 170—204
- 5) 植松七九郎: 精神医学. 「精神分裂病」, 第4版. 文光堂. 1947, pp 200—234
- 6) Nishizono M, Hasuzawa T: Chronological observations of delusions in schizophrenics. *Kyusyu J Med Sci* 13: 79—86, 1962
- 7) 桜井図南男, 西園昌文: 精神分裂病像の時代的変遷. *精神医学* 6: 369—373, 1964
- 8) 石井 厚, 福田一彦: 精神分裂病性症状の変遷. *精神神経誌* 82: 474—484, 1986
- 9) 小田 晋: 社会変動と精神障害. *精神医学* 13: 1184—1200, 1971
- 10) 藤森英之: 精神分裂病における妄想主題の時代的変遷. *精神神経誌* 80: 669—703, 1978
- 11) 小山内実, 奥村一之: 妄想内容の変遷について. *岩手県立病院学雑誌* 10: 59—61, 1971
- 12) 藤森英之: 精神分裂病の妄想主題の変遷について. *精神神経誌* 77: 409—416, 1975
- 13) 藤森英之: 松澤病院における宗教妄想の時代的変遷について. *精神医学* 18: 1279—1291, 1976
- 14) 藤森英之: 症状変遷について. *精神医学* 21: 791—798, 1979
- 15) Klaf FS, Hamilton JG: Schizophrenia—A hundred years ago and today. *J Ment Sci* 107: 819—827, 1961
- 16) Brill NQ, Glass JF: Hebephrenic schizophrenic reaction. *Arch Gen Psychiatry* 12: 545—551, 1965

- 17) Morrison JR : Changes in subtype diagnosis of schizophrenia—1920 to 1966. Am J Psychiatry 131 : 674—677, 1974